

## 石垣島

と  
短歌まつむらゆりこ  
松村由利子

昨春、沖縄・石垣島へ移り住んだ。転入届を提出して市役所を出ると太陽がまぶしく、何ともいえない嬉しさがこみ上げてきたのを思い出す。もう旅行者ではない、私はここで暮らすのだ、としみじみと思った。

石垣島に引越したと言うと、たいていの人は驚き、「一体どうして？」と訊ねる。本当のところ、それはいろいろな偶然が重なり合ったとしか言いようがないのだが、場所に「呼ばれる」ということがあるとしたら、私も島に呼ばれたのだと思う。美しい海に惹かれてダイビングしに何度か訪れるうちに、何かなつかしいものを感じ、ここなら一生住みたいと思える場所と出会ったのである。

初めのころは島について何も知らず、「沖縄」の中に「石垣島」があるのだと思っていた。もちろん、行政区域としては沖縄県内なのだが、本島とは離れた「先島諸島」の一部であり、さらに細かく言うと「八重山諸島」に所属するのである。島の人たちが「沖縄では」と話すのを聞いて、最初はわけがわからなかったが、だんだん理解するようになった。十三世紀末から十五世紀末にかけては小国家が形成されていたが、後に琉球王府の支配を受けるようになったという歴史もあり、八重山は独自の文化を誇るところなのだ。

八重山は「詩の国、歌の島」と言われる。季節ごとの多種多様な祭りにおいて、それぞれの歌が伝承され、今も歌い継がれている。歌だけの古謡に、中国から伝来した三線の伴奏が加わり、さらに様式美が洗練された節歌になったという。伝統的な歌謡は、古謡だけで八〇〇曲を超え、節歌は一五〇曲に及ぶ。旋律の美しさは言うまでもなく、その詩句は、他の地域の歌と比べて自然に対する観察力が優れ、情感が豊かで格調高いとされるため「歌の島」と称賛されるのだという。

「八重山古典民謡」は、一九八三年に沖縄県無形文化財に指定されている。古謡の節に共通語の歌詞をつけた「安里屋ユンタ」はよく知られており、抒情歌「トゥパラマ」も有名だ。

こんな「歌の島」に来たのだから、島の歌、それもよい歌を作りたいと思うのが人情だろう。しかし、今ひとつ気が進まないのは、わが師が既に名歌を詠んでいるからだ。

石垣島万花艶（はな）ひて内くらきやまところはかすかに狂ふ

馬場あき子

この歌は一九八七年三月、作者が御嶽を訪れるために、七つの島を巡った時に詠まれたものである。一九九一年に刊行された歌集『南島』（雁書館）に収められている。さまざまな花が美しく咲き乱れる島の様子にうっとりしつつ、本土から来た人間である自分の心の底には、何か後ろめたいような感情があつて落ち着かない——そんな思いではないかと解釈している。一首全体には、色鮮やかな花の放つ香りと、ふるえるような痛みが渾然と漂う。凜とした韻律は、この時期の作者ならではの響きであると同時に、沖縄という地を詠う緊張感でもあろう。

私は沖縄を訪れる度に、いつも自分が「日本人」であること意識させられてきた。太平洋戦争末期の激戦や広大な米軍基地を思つて申しわけない気持ちになつた。おそらく、沖縄を訪れる人の多くが同じ思いを抱くのではないだろうか。この歌は、作者が沖縄に対して狂おしいほどの謝罪の気持ちを抱えつつ、それを抑制して「やまと」ころはかすかに「狂ふ」と表現したところが読みどころだと思ふ。とうてい謝罪しきれものではないという慎ましい思いが「かすかに」に込められている。沖縄では、本土の人を「ヤマトンチュ」と呼ぶ。それを「ヤマト」と縮めると、少し揶揄するような響き加わるらしい。「外国人」を「外人」というのと、似たニュアンスかもしれない。先日、石垣島在住の陶芸家に取材するために電話した際、「ヤマトから電話」と取り次がれ、「そうか、自分はヤマトなんだ」と改めて思った。私の「やまと」ころが、たじろいだ瞬間だった。

本土の人を呼ぶのに、「ナイチャー（内地人）」という名称も

ある。「ヤマト」はいつまでたっても「ヤマト」だが、「ナイチャー」には進化形がある。島に数十年住んで地元になじめば、「島ナイチャー」と呼ばれるようになるのだ。石垣島に生まれた二十代の女性が、自分の父親について「私はシマンチュ（島人）だけど、お父さんは島ナイチャー」と言うのを聞いたときには、ちょっとびびくりした。女性の父親は他県から移り住んだ人だが、三十年近く島に暮らしている。年数としては娘よりも島の生活が長いにも関わらず、そう言われてしまうのか、と考え込んでしまった。けれども、沖縄出身の人、つまり「ウチナンチュ」になることがかなわない以上、何とか島ナイチャーを目指すしかない。それには、島になじみ、島の自然や文化を丁寧な詠ってゆくことが大切だろう。馬場あき子の名歌があるからといって、歌を作らないわけには行かない。

#### 体内に異物受け容れ吐き出せぬ沖縄という貝の抱く闇

二年前に作り、珍しく師に褒められた歌だ。その時、何か大いなるものに「まあ、これくらい歌が作れるなら、移住して来てもいいでしょう」と許されたような気がして、ほっとしたのを思い出す。

島ナイチャーを目指しつつ、「わが島」の歌を作り続けたい。

次号はなみの亜子さんをお願いします。